

みず き あと  
水 城 跡

大野城市教育委員会



図1. 水城跡全景（西から）

水城跡は日本の古い歴史書である『日本書紀』天智天皇三年（西暦664年）の項に「筑紫に大きな堤を造って水をためた。名づけて水城と言う。」と書かれていることから知られる史跡です。今、私達が見る水城跡は大きな土塁（堤）だけですが、土塁の博多側には幅60m、深さ4mもの大きな濠（ほり）があってそこに水を溜めていました。濠は長い年月の間に埋まってしまいましたが、本当は濠と土塁で博多湾からの敵の進入を防ごうとした防衛施設です。図1は水城跡を西側上空から撮影したものです。JRなどで切られていますが、まっすぐのびた土塁がよくわかります。

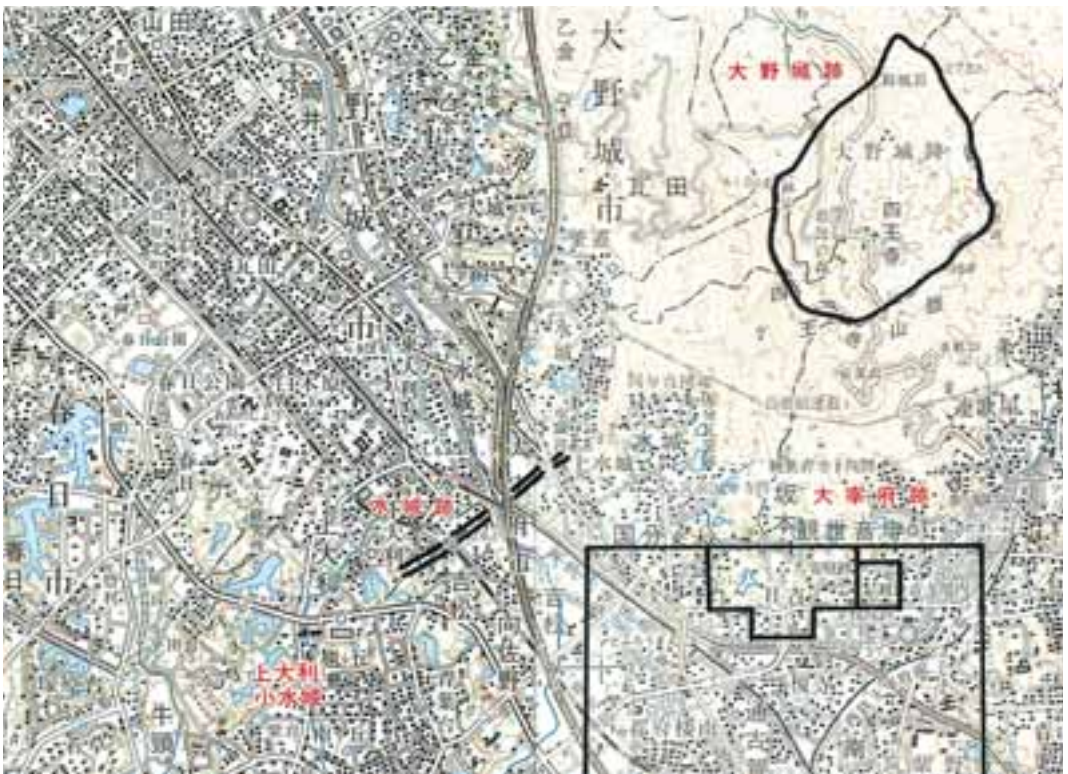


図2. 水城と大野城、大宰府（国土地理院発行地形図より）



図3. 水城西門付近想像図

どうして水城を造ることになったのでしょうか。それは当時の国際関係に理由があります。当時の朝鮮半島には高句麗、百濟、新羅という3つの国があり、新羅が唐（現在の中国）と手を結んで高句麗と百濟を滅ぼそうとしていました。ところが、日本の大和朝廷は百濟と仲が良かったので、応援の軍隊を百濟に派遣します。しかし、白村江の戦いで唐・新羅連合軍に負けてしまいます。九州もせめられたら大変だというわけで現在の福岡市内にあった役所を内陸部に移し、その役所を守るために水城を造ったのです。



図4. 木樋（九州歴史資料館提供）

こうして造られた水城ですが、発掘調査によってわかってきた構造は次のようなものです。

まず、大きさは図5に示すように、土塁の幅80m、高さ約13m、長さ1.2kmもあります。前面の濠に溜める水は太宰府側にある水路から地下を通して流し込みます。地下の水路は図4のように厚さが20cmもあるヒノキの大きな板を組み合わせて造りました。幅1.2m、高さ0.8mありました。これを木樋と言います。1本だけでなく、何本もあったでしょう。

水城には2ヶ所の門がありました。県道112号線の所が東門、大野城市の下大利4丁目には西門がありました。西門は発掘調査が行われ、立派な門であったことがわかりました。そして鴻臚館へまっすぐ続く官道の跡も見つかりました。当時の様子の想像図が第3図です。

このような大事な水城跡ですので、国の特別史跡に指定されています。土塁だけでなく今は埋まった濠の跡も後々まで大事に残していかなければならないでしょう。

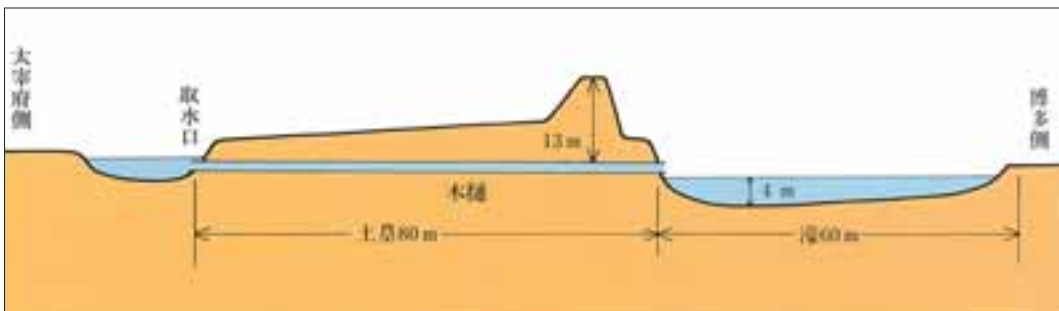


図5. 水城断面図（古都大宰府を守る会編『目で見る大宰府』より）